

---

記

録

---

---

## ニューデリーの一週間

大 嶽 藤 一

---

### 本隊と合流

8月24日

この夜は雨が上った蒸し暑い日であった。私がデリーに着いた時に比べれば暑さもだいぶ和らぎすごし易くなっていたが、この日ばかりは例外であった。到着ビルで皆が来るのを待っていると、一番初めに姿を現したのは何んとサリーンであった。彼が日本の鉄鋼業界の招きで日本に言っているのは、日本からの知らせで聞いてはいたがまさか同じ飛行機に乗っているとは思ひも寄らなかった。しかし本隊の連中はサリーンの顔を知らないし、彼ほどの人物ならファースト・クラスで来るだろう。だとしたら同じ飛行機でも話す機会も無かったかも知れない。本体の連中は一番最後にキョロキョロしながらビルに入って来た。田舎から東京に来たおじさんの様に何んとも場違いな感じであった。

しかし、そんな事より皆がデリーに来る事が出来た喜びの方が大きく、お互いがその存在を確認した時、顔いっぱいの笑顔を浮かべあっていた。それは何度となく屈折し、時には後退し、そんな繰り返しの後の喜びであった。とも角、彼等も不慣な英語で少々時間はかかったが（最後にやっと通関して来たのが本音であるが）通関を済ませ外に出て来た。早速サニーを紹介し、チャーターしておいた車で宿舍のユースへ向う。車の中でサリーンの事を聞くと彼らはサリーンの方から話しかけられたとの事で、四苦八苦しながら話したそうであった。サリーンも良く隊員が登山隊であることが分ったものと関心する。多分、山靴を履いていたので、そんなことから判断したのだろう。それにしても気さくな人である。

### 仕事は山ほどある

8月25日

これからやらなくてはならない事は山程あった。まずは隊荷の通関である。これは無税で通関しなければ大変な税金を取られるし、事実、相当な税金を取られた隊もあった。これはI.M.F.から税関あての無税通関の依頼状を今日もらう事になっていた。そして私のビザはニューデリー通信でも触れている様にまだ発行されていなかった

た。一日も早く発行してもらわなくては、デリーで無駄な日々を送らなくてはならない。

またL.O.が到着していない。彼は一度デリーに来た様であったが、本隊のビザが日本でなかなか発行されず、その為に出発が遅れている間に帰ってしまったそうである。

これは我々にはどうしようもないが、L.O.が来ないことには話しにならない。そしてもう一つは滋賀岳連隊との話し合いであった。彼等は同じファブランの登山許可が発行されている。つまり同じ山に同時に二隊に許可が発行されている。これをお互いに話し合いこれからの遠征活動をスムーズに行なわれなければならない。万が一にでもお互いがいがみ合ったり、凝りを残す事があってはならない。後はマナリまでの隊荷の輸送等の手配や各分面への挨拶や日本への連絡事務的な作束であった。

まずは TELEGRAPH OFFICE へ行き東京へ本隊到着を知らせる、これは14.35 Rs であった。次にこの近くの東京銀行にて全員300ドルずつルビーに交換する。各自東京より用意して来た特別財末に金を仕舞い込む。これにはズボンの裏に特別のポケットを作った者、首から紐をかけ下着の下に仕舞い込む者、又その紐をさらに長くしてパンツとズボンの間に挟む者と色々であるが、各自、自分のやり分が一番良いとお互いにけちの皆けちをやっていた。やれ金を出すのが面倒だが、汗で金が濡れる可能性があるとか、いや落す危険性が大きいとか、色々けちを皆けた後は皆自皆の分法が一番良いと信じ疑わなかった。

この頃より雨が激しくなって来たが、I.M.F.へ行がなくてはならない。タクシーを止めたが、建物からタクシーの数mの間にびしょ濡れとなる始末だった。I.M.F.は実に色々な所にある。会長のサリーンは鉄鋼省だし、チャクラパティはサウスブロックの国防省だし、チャタジーは国防省のQブロックである。今日はチャタジーに会いに行くのでQブロックに向う。先に触れている様に明日の通関の為に無税通関の依頼状をI.M.F.より発行してもらおう為である。案の定、まだ依頼状は出来ていなかったが、その原稿は出来ていたのですぐタイプを打ってもらおう。その間、私のビザをI.M.F.からもプッシュしてもらおう様をお願いすると、内務省に電話をしてくれることを約束してくれた。

次は腹ごしらえである。朝はユースホステルのコンチネンタル料理であったから昼はインド料理にしようと思つた。コンノートプレスのミナルというレストランへ行く。ここはほかのレストランと比べ比較的安い、味はインド料理は皆辛いばかりなので我々には良く分らない。本隊の連中は初めてのインド料理なので少々ふざけでやった。青い

辛唐子をこれは美味いから食べて見ろと言ったら、本当にかぶりとやってしまった。次の瞬間その唐辛子は床の上に無様に落ちていた。私は唐辛子は赤いものと思っていたし、本隊の連中もそう思っていたのだろう。この青い唐辛子がまた大変辛いのである。通訳のサニーでさえ丸ごととは食べなかった。(那須は不自然に平気を装い1個丸ごと食べていた)この様にインド料理はカレーは言うに及ばず、ヨーグルトにまでこの青い唐辛子を刻んで入れてあるので、私のように辛いものが苦手な者は閉口してしまう。

コンノートプレスでサンダル等を買ひ、丁度聞かれていた防衛博へ入る。ここには72年の印バ戦争の時の戦利品等も展示されていたが、これの為我々はシャヤーズを断念せざるを得なくなってしまった。戦争等我々には無意味にしか写らなかった。そしてY M C Aの滋賀岳連隊を尋ね、お互いの立場を話し合い、今後の方針を決める。彼等の本隊は今夜ニューデリーに到着の予定であった。又彼等のL. O. であるカンナ氏が来ていた。少々小柄な人の良さそうな人物であった。

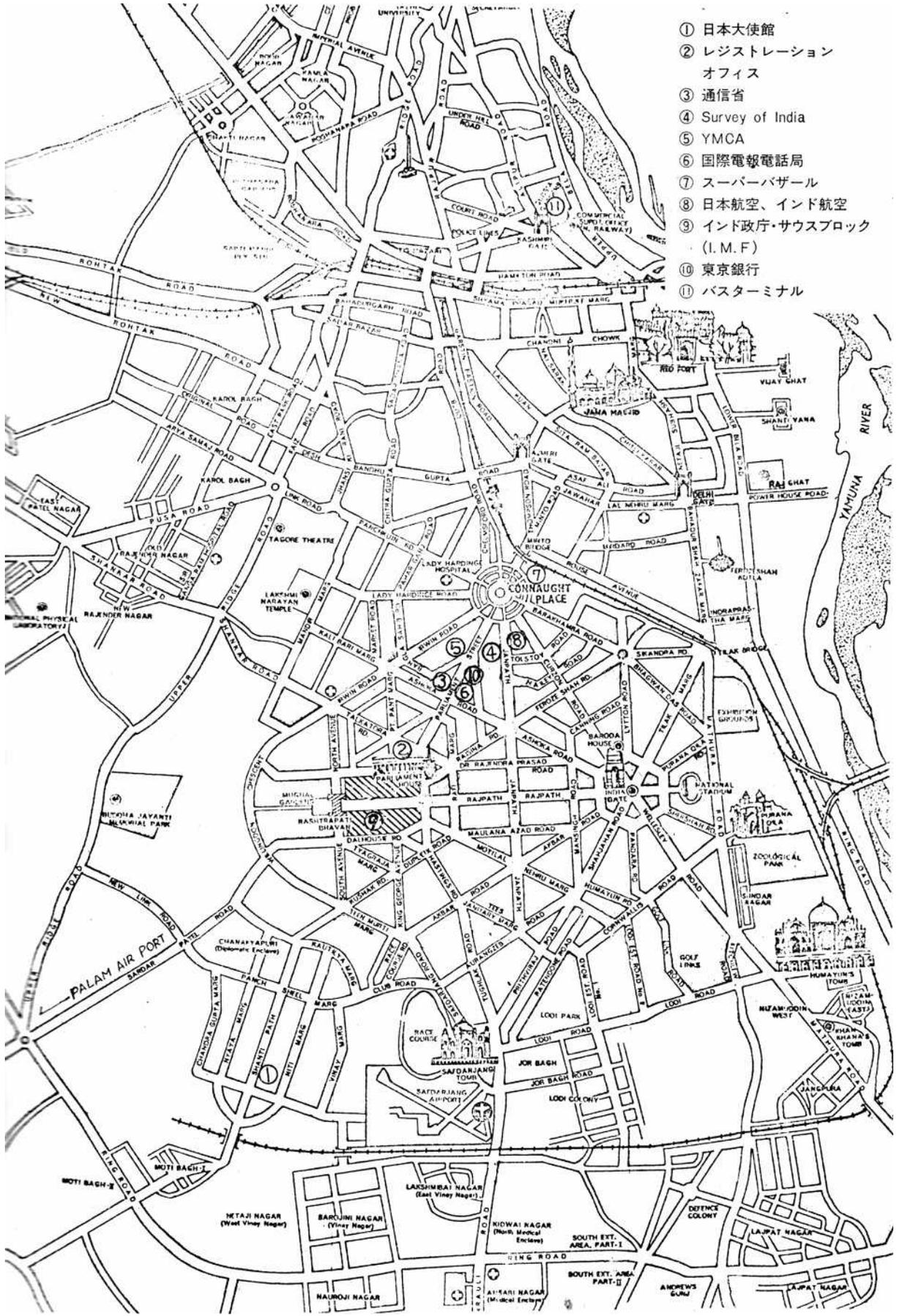
### 無税通関に成功

8月26日

今日は荷物の通関である。これには大嶽、増子、那須の3名が向う。井口とサニーは通信省ヘトランシーバーの申請に向う。受付でその旨を伝え、Wireless adviserのA.M. Joshi氏に通された。この申請は我々の予想に反し、けたたましく厄介な書類を提出しなければならず、その場では不可能と思ひ、これらの書類を持ち帰り月曜日に提出することにする。又許可までには少なくとも2通間はかかると言う、二週間も待っていないが、この交渉は申請書用紙を提出した時にすることにした。

一方通関に向った3名はパラム空港ヘユースからタクシーで向う、サニーに教えてもらった様にまずはカスタムゴードウンへ行き、そこのエアインディアの事務所で書類をもらう。我々はすでにエアインディアより荷物到着の通知が届いていたのでこれを見せると通関に必要な書類をくれたが、この通知がなくとも、行けば調べてくれる、この書類を待ち、いよいよ税関へ。とも角受付らしき所へは行ったが、2~3ヶ所書類にサインをもらって無事、荷物の検査場所へたどり着くことができた。

ここで我々はI.M.F.からの書類(前記の無税通関依頼状)を見せたら奥の室へ通され、何やら偉そうな人と会い、再び書類を見せると、係の人を呼び、いよいよ検査に入った。狭い税関はごった返して、インド人が徹底的にチェックされているのが印象的であった。彼等の別送荷物は全部開けられ旅行カバン等は逆さにして、ふる



- ① 日本大使館
- ② レジストレーション  
オフィス
- ③ 通信省
- ④ Survey of India
- ⑤ YMCA
- ⑥ 国際電報電話局
- ⑦ スーパーバザール
- ⑧ 日本航空、インド航空
- ⑨ インド政庁・サウスブロック  
(I. M. F)
- ⑩ 東京銀行
- ⑪ パスターミナル

っていた。我々はまずパッキングリストを提出すると consumable と unconsumable とに分けるという。さあ大変である。うっかり 3 人共辞書をホステルに忘れてきた。我々の貧弱な英語の何処にもこの単語はなかった。到着の時もそうであった様に、又ここでひとしきりゼスチャーがほとんどの会話が続いた。やっとのことで、どうやら無くなってしまふ物とそうでない物とに区別しろと言っている様であった。安の定、帰って調べると、consumable は消耗品という意味であった。ともかく食糧、医薬品、メタ、フィックス・ロープ等は (consumable とし、天幕やホエーブス、その他の装備は unconsumable とし、パッキングリストに印を付ける。その間に我々の荷物は別の倉庫から隊員が立ち合い検査場へ持って来た。大嶽は今日のサリーンとの面会の前に滋賀岳連隊との話し合いの為、やはり通関の為に来ていこ滋賀岳連隊々長の居林さんと共に Y M C A へ向かう。

通関はここで昼休みの時間の為にストップしてしまう。税関の人々は昼食を食べに何処かへ行ってしまった。我々はサニーに手配してあるトラックの返事がこないし、近くに食堂等はなく、ジュースだけの昼をとる。一時間位の時が過ぎただるか税関の人々が戻って来て、どうやら始まった様だ。さあいよいよ開封にかかる。我々はこの時係官に東京より持参した 100 円の使い捨てガスライターを渡す。これは後から考えると良策だっこ様だ。20 個近いパックの 3 分の 1 位しか開封せず、またパッキングリストが整っていた為か、1 パックからは 1 品だけを係官が取り出し、それが何であるかパッキングリスト中の品名を示すだけで簡単に終了。この調子だと税金は掛けられずに済みそうだ。この時我々は 5 部パッキングリストを持参したが、何やかにやと使いもう少し多目に用意した方が良い。再びパッキングをする。(この時がムテープとナイロンロープが必要、税関は開けたら開けばなしである。) 再び開封出来ない様に封印がされ、保管料 (1 パック 1 日に付 1 ルピー、但し到着後 1 週間は無料。) を支払い、書類に先程の上役がサインをする。

まだサニーに手配していたトラックが到着せず電話をしたいが公衆電話がなくポーターにチップを渡し事務所の電話を借りた。しかしサニーはまだ井口と一緒に連絡が取れない。ともかく出るだけはと出口の係員に書類を渡し、荷物の数をチェックして無事通関を終了した。気にしていこ割にはスムーズにいった。税金も掛けられず、ホッとする。やはり一番効果があつこのは I . M . F . からの依頼状だろう。荷を運び出すと外にはインド独特の前輔駆動の三輪車 (車輪は偏心して回る何んともユーマラスな自動車ではあるが) がたむろし、滋賀岳連隊と一緒に一台の三輪車をチャーターする。こんな事ならサニーに手配を頼まなくとも済んだと思いつつユースへ向

う。尚このトラックは空港～ユース～Y M C Aまで40ルピーであった。

### サリーンに逢う

一方、居林さんとY M C Aに白った大嶽はここで通信省より戻った井口と会い、滋賀岳連隊と話し合い、結局、1峰を2隊が登る状態は好ましくないとの配慮からサリーンの力でなんとか他のピーク（滋賀隊はバラシグリ、我々は GANGSTAN）が許可されるようお願いする事にした。しかし種々の事情を考え余り許可を待てない状態を考慮し、その期間は1週間位をメドにし、その可能性を託した。

サリーンに面会すべく、チャタジーの所へ向いたいが、サニーが来ない。彼は時間を守る男であるが肝心の時に間に合わないとは皮肉な事だ、仕方なくチャタジーの所へ我々と滋賀岳連週隊それぞれ2人ずつで向う。不幸中の幸か、サリーンは会議が延び少々遅れるとの事であり、その間にサニーがやって来て胸を撫で落す。案の定スクーターが故障し友達の所へスクーターを預け、タクシーで駆けつけたとの事である。挨拶だけならサニーが居なくとも何とかなるが、事情が事情だけに、サリーンにどうやってお願いしたものかと頭をかかえていたところであった。その内チャクラバティーも来て結局7人でサリーンの事務所へ向う。彼は大きな一室を構え、周りにはインド隊のエベレスト登頂の写真や日本隊の写真も飾られ、いかにも山男らしい室であった。彼は飛行場での第一印象通り、大変親しみ易い人柄であった。彼は出された紅茶とナッツを全部食べなければ帰ってはいけない等と冗談を言ったりした。しかし肝心の他のピークの許可はサリーンの力でもどうすることも出来ないとの返事にガックリする。明日お互いに話し合い結論を出すことを約して鉄鋼省を後にした。

### ニューデリーの休日

8月27日

今日は日曜日なので対外的な動きは出来ない。もっぱら日印親善（少々オーバーだが）に尽すことにする。まずはサニーの友達のバルジットさんの店（ジャパニーズ・コーナーという女性洋品店）の開店式に招かれているので彼の店へ向う。店の前に赤や緑の原色の鮮やかな模様の天幕が張られ、店の中には神様が祀られ、4人程のバラモンがインド風オルガンとタイコで歌を唄っていた。一人ずつ神様の前にひざまずき頭を地面につけお祈りを行っていた。バルジットさんはサニーと同じシック教であるのでターバンを巻いているが我々は髪の毛が、出ている。シック教の神前では髪の毛を見せるとはいけないというので、ハンカチを頭にかぶり、落もない様に結び、前の人と同じ

動作を見よう見まねでお祈りをする。1時間程のお祈り(といっても我々にはインド風の歌に聞こえるが)後、甘い菓子とコーラが配られた。幼い頃、みかんや餅欲しさに近所の建前には必ず行ったが、ここも同じであった。近所の子供たちだろう、その菓子をもらう為に行列が出来ていた。衣服が粗末な為か、どこか哀れみを感じる。最後にサニーのお父さんが挨拶し(多分そうなのだろう、ヒンディ語でさっぱり分らないが)、ここに来ている日本人の方がこれから山に登るので安全を祈って下さいと、我々の安全を祈ってくれた(これは皆が我々の方を注視したので、げげんな顔をしている我々にはサニーが教えてくれた。)この思わぬ出来事を我々はしっかりとそれぞれの胸に刻み込んだ。

次は外務省のバンダリ氏のお宅へ招かれている、私の1ヶ月半ものニューデリー滞在の間に、この遠征の為に色々と援助していただいた人々に、この様に招かれるのは少々気が引けるが、これも経験と思いい好意をありがたく受けることにしていた。彼はインド観元局の仕事で日本に五年もいたので、日本語が出来る。彼との会話は双方ともブロークンの日本語と英語のちゃんぽんで、例えば、

You had been Nikko ? これでも最後を上げるとりっぱな疑門文だった。

Yes kegon is very good , very much 雨落ちてくる、

雨とはしづきのことの様である。彼はもちろん英語は話せるが、わざわざ簡単に話してくれたし、その中に変な日本語が混っていた。ともかく世間話もこうなると落語よりおもしろい、私と井口は滋賀岳連隊との話し合いがあるので昼頃、彼の家を辞しY M C Aへ向う。増子と那須は後で奥さんの手料理を御馳走になり、子供たちに日本から持参したプラモデルを作り楽しく過した。

一方、私と井口はY M C Aにて滋賀隊との最終的な話し合いを行なっていたが、我々は互いに反対方向からファブランを目指すことを主張したが、(互いがファブランを目指したい気持ちを大切にしたい。又競走心に関しては我々がテイロット・ナラへ入る時期をずらすことで避けられると考えていた。)結局「ヒマラヤ通信」で触れている結論に達した。お互いの健闘を誓い別れた。

### さあ もう準備はできた

8月28日

昨日の話し合いを元に計画書を作る。タイプは打ったが、地図はコピーしなければならない。インドではコピー屋等は言うに及ばず、コピーの機械等何処にも無い。ただ一つ日本大使館にあると聞いていたので、早速鈴木さんをお願いしてコピーを手に

した。私はサニーと一緒に Registration office に行く。やはりまだ本庁より書類が回って来ていないと言う。最初の話では二週間程で書類が回って来るとの事であったが、もう三週間を過ぎている。これは憶測だが、書類を回すのを忘れていた節があった。又 I.M.F. からプッシュしてもらうことにしてユースに戻ると L・O が Y M C A に来ているという。井口と増子がすでに行っている所以我々もすぐに Y M C A へ向う、ロビーに滋賀隊の居林さんや彼等の L・O のカンナ氏と一緒に我々の L・O のシャルマがいた。彼は大柄のガッチリとした体格の持主で山の経験もある軍人であった。彼の話しでは 6000m 級の山は二週間位で登れると言う。聞いているとエベレストでさえ簡単に聞えてくる。まあ我々は高度順化も考え、自分たちのペースで登る旨をとくと伝えておく。L・O と滋賀隊と一緒に通信省へトランシーバーの申請に行きジョシ氏に説明を聞き書きあげる。我々は電気を学びその方に仕事を持っている者が多いが、それでもこの申請書にはまいる。放送局でも作るのではないかと思う程の内容である。

通信省を辞し、その足で I.M.F. のチャタジー氏へ我々と滋賀隊の計画書を双方の L・O と共に提出し、ルート図によりお互いのルートを説明し、最終的な許可を得た。これで我々は 6109m 峰へ向い、滋賀隊はファブランへ向うことを決定する。この間、増子と那須は砂糖を購入する為にコンノートプレスへ向う。これはマナリで砂糖が購入出来るかどうか疑問の為であったが、マナリでは購入が可能であった。

8月29日

今日はいよいよマナリへ荷を出荷出来る。トラックに井口と増子が同乗し、滋賀隊の二名と荷も一緒に運ぶことにした。井口は昨日から下痢の洗礼を受け、青い顔をしている。可哀想だがこれから一日半トラックの荷台で過さなければならない。まあバスよりもすぐに止まれるから、その点は少し具合が良いが、荷台は酷かも知れない。トラックが来るまで、東京銀行にてドルチェンジをし、コンノートプレスのエンパイア・ストアでタバコ(プリストル 0.75Rs)を 400 個買う。これもマナリでの購入を心配しての事であったが、マナリには立派なタバコ専門店があった。トラックは前にサニーに手配を依頼していた。彼の友達が運送屋をやっていて具合が良い。トラックは昼頃ユースに着いた。インドにしては立派なトラックであった。我々の荷と Y M C A で滋賀隊の荷を積み込んだが、荷台はまだガラガラであった。これはチャーターしたので運転手の方は平然としていて、荷が少ない方が運転し易いとも言いたげな顔をしてタバコをふかしていた。我々の方は何となくもったいない気がしていた。又運転手は二時までニューデリーの外に出なくてはならないと言いながら(ニューデリーのトラックで

ないので、その様な規則になっているらしい) それに間に合いそうになく我々が必死で荷を積み込んでいるのに平然とし、まだタバコをふかしている。インドでは仕事の分担がはっきりしており、手を出そうとしなかった。

あわただしくトラックが発売した後は気が抜けコンノート・プレスの緑の上で昼寝をしていた。

8月30日

残りは私のビザだけとなった。一応9月4日までと見当をつけ、予定を組んでいる。それまでにビザが出ないとまたしても遠征活動に支障をきたす。それまでに色々な手を使ってプッシュしてもらおうことにする。

L. Oのシャルマが10時頃やって来たがサニーの来るまでの一時間余りは、インドと日本の物価の比較等をしていた。やはり工業製品は日本の方が安く、一次製品はインドの方が安かった。11時頃サニーが来る。今後の日程を打合せ、私のビザの件を頼んでシャルマと別れる。

我々はサニーの家で昼食を御馳走になる。家族の暖かいもてなしにひさしぶりに寛ぐ。トラックで行った井口と増子は今頃トラックの荷台で挨りまみれで揺られていることを思うと気が引けるが、勘弁してもらおう。又インドの文化に親しもうなどと理屈を付けインドの映画を見に行く。これはヒンディ語なのでサニーに通訳してもらいながらの観賞であった。

8月31日

昼までユースの周りを散歩して帰るとシャルマが来たらしく、メッセージが受付にあり、それによるとビザは明日発行されると言う。彼のスペリングは判別に苦しいが、朗報に喜ぶ。昨日、彼に頼んでおいたので、色々動いてくれた様であった。やはり軍人の強みかと思ったりもする。ともかく明後日はシムラへ立てる。すぐに電報局へ向いマナリとシムラへ電報をうつ。

9月1日

10時30分にシャルマが来る。レジストレーション・オフィスへ向いビザの発行をやっと受けた。待ちに待ったビザであった。ビザが切れて約一ヶ月たってしまった。おかげでせっかく三ヶ月のビザが後二ヶ月になってしまう。二ヶ月なら遠征活動には支障がないだろう。このビザはパスポートには書いてくれず、別の紙にヒンディ語と英語で書いてあった。

明日のシムラ行きのバスを予約しにオールド・デリーのバス・センターへ行き予約をする。このバスの事務所が掘立小屋の様なしる物で、こんなバス会社のバスでは先

が思いやられるが、みんな同じ様な事務所なので仕方がない。となりに立派なビルを建てつつあったが、これはいつ完成するのか、極めてのんびりと土や石を運んでいた。帰りに東京銀行へ寄り残りの金を貸金庫にしまってもらおう。これで明日はいよいよシムラだ。

